

「明治日本の産業革命遺産」が世界遺産として登録され、そこに長崎県の高島と端島の炭鉱が入れられました。高島と端島の炭鉱は八幡製鉄、三池炭鉱、長崎造船とともに戦時に朝鮮人が強制連行された場所です。

日本への労務動員により強制連行された朝鮮人は80万人ほどですが、そのうちの4～5割が炭鉱に動員されました。炭鉱に強制動員された朝鮮人は30万人を超えます。その動員数は、福岡（筑豊）で約15万人、北海道で約11万人、佐賀・長崎で約4万人、常磐で約2万人、宇部で約2万人とみられます。

高島は長崎港から約14・5km先、端島はさらに4km沖、端島から南の野母半島までの距離も5kmほどです。ともに「圧制のヤマ」として知られ、端島は軍艦島と呼ばれています。三菱高島炭鉱（三菱鉱業高島礦業所）は高島と端島の両坑を持っていました。戦時には中国人も連行されました。

史資料を読み、証言や調査から学び、現地を訪れることで、記されてこなかったことから、声になっていないものごとを形にすることができますが、歴史の記述では小説・映画のように、架空の人物を設定することはできません。

以下、高島炭鉱への強制連行者数、死亡者の状況、強制労働の実態、現地地図、歴史の歪曲の問題の順にお話しします。

※ 辞典や資料名については、『調査・朝鮮人強制労働①炭鉱』（2013年、社会評論社）の第6章「三菱鉱業高島炭鉱」に記しています。高島・端島の死亡者名簿については『戦時朝鮮人強制労働調査資料集 連行先一覧・全国地図・死亡者名簿 増補改訂版』（2015年、神戸学生青年センター出版部）に詳細を掲載していますので、そちらを参照してください。

1 史料を読む① 高島（高島・端島）への強制連行者数

高島には1910年代後半から朝鮮人が募集されました。三菱は1917年9月に朝鮮での募集を認可され、1918年に朝鮮人数は334人になりました。当時の高島炭鉱の労働者数は約3400人で、朝鮮人が1割を占めました。朝鮮人は坑内で166人（高島坑84人、二子坑12人、端島坑70人）、坑外で186人でした。

三菱は早くから朝鮮人を労働させたのです。事故死した朝鮮人もいました。

1933年ころ端島へと移住した姜時点は、端島には、所帯持ち朝鮮人が100世帯、吉田飯場には110人の朝鮮人坑夫がいたと話しています（林えいだい『死者への手紙』）。

1935年時点で、高島・端島に350人の朝鮮人がいたこともわかります（前川雅夫編『炭坑誌』）。このように朝鮮人の強制連行の前史があるわけです。

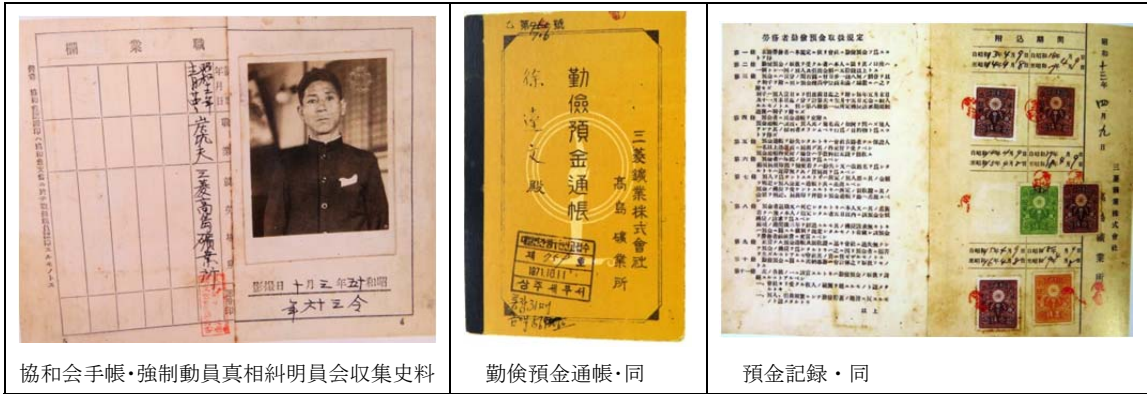
韓国の強制動員被害真相糾明委員会は、1937年に高島に募集され、その後も高島で労働し、現地で現員徴用されたとみられる朝鮮人の協和会手帳を収集しています。高島炭鉱の勤儉預金通帳もあります。郵便貯金ではなく、会社に預金させていたのです。

協和会手帳には顔写真もあります。このようなまなざしの存在をふまえ、語られることのなかった数多くの存在にこたえることができるような表現が求められていると思います。

では、高島炭鉱（高島・端島）への強制連行者数についてみていきます。わたしは動員数を約4000人と推定しています。

中央協和会の「移入朝鮮人労働者状況調」によれば、高島炭鉱（高島・端島）への1939～42年6月までの朝鮮人連行者は1110人です。石炭統制会の統計史料をみると1943年から44年の連行状況がわかります。1939年から43年末までに2000人以上が連行されたとみることができます。さらに、44年1月から8月までの連行者数約

700人、9月のサハリンからの転送者など400人を加えれば、3100人以上となります。ここには1944年10月から1945年度の動員者や在留朝鮮人で現員徴用された人、数百人が入っていません。それを加えれば4000人ほどになるでしょう。



協和会手帳・強制動員真相糾明委員会収集史料

勤儉預金通帳・同

預金記録・同

また、石炭統制会の統計史料では、1944年12月の高島の現在員数を1914人としています。長崎にある三菱の崎戸炭鉱は3002人と記されていますが、この崎戸炭鉱には約6000人が連行されています。現在員の2倍ほどが連行されているわけです。このような動員状況から、高島も同様に1914人の倍の人数、約4000人が動員されたとみることができると考えます。

このように、統計史料から、1939年から45年の高島炭鉱（高島・端島）への朝鮮人動員数を4000人と推定しているわけです。

厚生省勤労局「朝鮮人労務者に関する調査」の長崎分にある高島炭鉱の名簿からは、1942年から45年までに高島・端島に動員され、8・15までに残留していた朝鮮人1299人分の氏名・本籍・未払い金額などがわかります。

この三菱による報告数1299人は、帰国者数だけを動員数として報告するという不十分なものですが、約1300人の集団的な動員の具体的な状況をつかむことができます。

この長崎分の名簿は高島の集計表と名簿とが分離していたために、当初、名簿の事業所名が不明でした。端島に連行された証言者の創氏名が複数、名簿に掲載されていることから、高島（高島・端島）分と判明しました。

<table border="1"> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> </table>	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	<table border="1"> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> </table>	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	<table border="1"> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> <tr><td>氏名</td><td>石橋 末</td><td>籍地</td><td>朝鮮 咸興</td></tr> </table>	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興	氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											
氏名	石橋 末	籍地	朝鮮 咸興																																																											

1943年10月金堤から連行

1944年8月京畿から連行

1945年1月順天から連行

動員状況は以下の表のようになります。1942年には忠清道、黄海道、43年には全羅道、黄海道、44年には慶尚道、京畿道、45年には全羅道などから、集団的動員がありました。これらは政府と企業の動員計画による動員であり、強制的なものでした。17・

18歳の青年が集団連行されたことや14歳の少年がいたこともわかります。

表1 三菱高島炭鉱への朝鮮人強制連行(厚生省勤労局名簿)

連行年月日	主な出身郡	8.15 在籍者数	退去日
1942.8.16	忠南槐山 88 他 2	90	8/26
9.5	忠北清原 63	63	8/26
10.18	黄海延白 35 平山 4 他 18	57	8/26
10.31	黄海碧城 52 他 7	59	8/26
12.10	全南光州 39 他 6	45	8/26
1943.1.22	全南和順 86 咸平 64 霊巖 15	165	9/20・24
1.26	全南和順 23 宝城 25 他 1	49	9/12・20
5.22	黄海信川 86 載寧 5 碧城 4 他 12	107	9/12・16・19・24
8.12	全南長城 34 高興 14 他 1	49	9/19
10.17	全北完州 20 他 1	21	9/19
10.27	全北金堤 121 他 4	125	9/19
1944.1.17	慶南晋州 52 晋陽 5 他 12	69	9/11・24
1.30	慶南南海 21	21	9/19・24
5.19	慶南咸陽 49	49	9/19・24
7.2	慶南宜寧 23	23	9/17
8.8	慶南密陽 14	14	9/17
8.13	京畿楊州 22 高陽 4 京城 4 他 11	41	9/17
8.27	京畿富川 13 開城 7 仁川 4	24	9/20
1945.1.19	全南順天 92	92	9/24
2.24	全北井邑 101 他 1	102	9/21
3.27	全北益山 32 他 2	34	9/24
計		1,299	

厚生省勤労局「朝鮮人労務者に関する調査」長崎県分高島炭鉱名簿から作成。

この名簿には逃亡者や死亡者の記載はない。8.15 以後も在籍して解雇された人々だけが記されている。

また 1939 年から 42 年 7 月までの連行者についての記載がない

※石炭統制会関係資料は、長澤秀編『戦時下朝鮮人中国人連合軍俘虜強制連行資料集』1（1992年、緑蔭書房）に掲載されています。

2 史料を読む② 高島（高島・端島）での死亡状況

ではつぎに、高島での死亡状況について「火葬認許証下附申請書」（『戦時外国人強制連行関係史料集Ⅱ朝鮮人1下』1991年所収）からみてみましょう。この史料は、端島での1925年から45年までの日本人、朝鮮人、中国人の死亡者の書類です。子どもも含まれています。

端島では、1939年までに朝鮮人労働者は50人以上が、落盤による圧死、窒息、ガス爆発、病死などで死亡しています。さらに、連行期の1939年から45年にかけても朝鮮人労働者50人ほどが死亡したことがわかります。

1939年から45年までの朝鮮人の死亡状況は以下の表のようになります。火葬認許史料から、埋没圧死、埋没窒息、頭蓋骨骨折など採炭現場での事故によって死亡したことがわかります。坂本鳳日さんは8月9日に空襲により死亡していますが、他の史料から長

崎刑務所で被爆死したことがわかります。

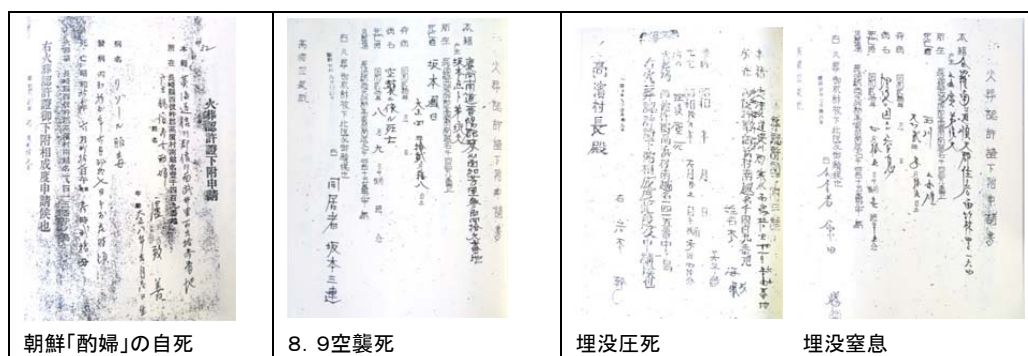
典拠に1の数字の記載があるものは端島での死者です。高島の二子坑などでの死者はいまも不明のものが多いのです。高島分の不明者を入れれば、亡くなった朝鮮人は100人近くなるでしょう。これらの死者の氏名は、高島炭鉱が戦後、厚生省勤労局に出した名簿には含まれていません。

表2 高島炭鉱死亡者名簿(1939～45)

死亡年月日	氏名	生年月・歳	出身	死因	宿主・同居等	典拠
1939.3.28	金弼壽	24	晋州	病	巖龍甲	1
4.13	金東起	1919.6	固城	圧死	巖龍甲	1
7.17	鄭興道	28	晋州	病	巖龍甲	1
8.24	崔武烈	27	固城	溺死		1
12.4	金又龍	32	固城	頭打撲	巖龍甲	1
11.14	朴義相	32	山清	胸打撲		1
1940.5.1	崔守龍	43	晋州	脳脊髄損傷	巖龍甲	1
6.24	郭鳳伊	45	達城	病	巖龍甲	1
7.4	李任述	36	咸安	外傷(右肺)	李斗雨	1
12.27	金英大	23(21)	固城	破傷風	李斗雨	1・2
1941.3.	曹龍業	19	密陽	労災		2
7.6	李在讚	52	釜山	病		1
8	金在顕	25	金海	労災		2
8.25	卜山泰寿	36(35)	金海	外傷(胸)	岩本幹	1・2
11.8	陳大名	31(30)	金海	埋没窒息	岩本幹	1・2
1942.2.18	表相萬	32	固城	埋没窒息		1・2
3.13	裴点道	23(22)	固城	頭蓋骨骨折		1・2
12.6	武木在守	46	金海	病	岩本幹	1
1943.2.3	李利實	47	—	病	岩本幹	1
5.10	高山文澤	26	濟州	埋没窒息	金原信一	1
5.18	国本相哲	33	江華	病		1
6.24	李又福	31	固城	埋没圧死	中川熊助	1
6.24	白川淳基	53	固城	埋没圧死		1
7.7	高原大成	26	清州	埋没窒息	岩本幹	1
7.13	李明五	31	—	埋没窒息	岩本幹	1
7.24	張明煥	23	忠州	病	岩本幹	1
12.19	陳道俊	54	統營	病	岩本幹	1
12.28	崔洛相	24	晋陽	埋没窒息	金原信一	1
1944.1.15	李海成	26	堤川	埋没圧死	岩本幹	1
1.15	呉本秀萬	44	碧城	埋没窒息	金原信一	1
1.24	金光萬吉		咸平	病	岩本幹	1
3.5	高島陽元	28	信川	外傷(脳)	金原信一	1
6.6	李 _ニ 完玉	22	金堤	溺死	金原信一	1
8.4	平岡相哲	37	咸平	病	金本斗明	1
8.10	岩本判石	27	達城	埋没窒息		1

9.4	金本興守	38	金海	埋没窒息	岩本幹	1
11.5	徳山性一	46	務安	埋没窒息	庄司倉吉	1
11.20	山内奉禧		信川	病	金原信一	1
11.22	大江順基	24	金海	病	岩本幹	1
12.3	鄭文根	31	晋陽	病	金原信一	1
1945.1.1	谷川仁 <small>イ</small> 天		晋陽	病		1
4.12	林裁鳳	1918.1	清州	埋没	岩本幹	1
4.24	金山鉄鎬	1925.12	光山	肺浸潤		1
6.30	永田月福	1906.2	論山	病	庄司倉吉	1
7.15	趙再變	1913.3	順天	埋没窒息	原田勝	1
8.9	坂本鳳日	1915.12	晋陽	原爆死(刑務所)		1・3
8.11	岩本三龍	1919.4	密陽	8/9 発病、(土木)		1
8.17	長原昌周	1922.11	大邱	病(敗血)請負業	金原信一	1
8.24	徐己得	1911.3	晋陽	戦災火傷		1
9.10	岩本鐘烈	1901.9	梁山	病	岩本圭澤	1
10.16	金本東植	1922.9	務安	病	松本他人	1
11.4	宮田海應	30	清州	病	松本他人	1

典拠 1 高浜村「火葬認許証下附申請」書類、2 大日本産業報国会『殉職産業人名簿』、3 長崎市「長崎朝鮮人被爆者一覧表」



端島や高島には、女性が炭鉱用の「慰安婦」として連行されました。1939年3月の段階で、日本人も含めて端島27人、高島49人の女性がいましたが(『炭坑誌』)、そこには朝鮮の女性もいました。現地では「朝鮮ピー」と呼ばれたようです。

端島の診療所で代診した金圭沢さんは、端島の31号棟近くに森田・本田・吉田(朝鮮人)経営の3軒の店があり、吉田屋から朝鮮人女性9人が受診にきたと話しています(『死者への手紙』)。

1937年、端島で「酌婦」とされた朝鮮人女性が「リゾール」(クレゾール)を飲み自殺しています。届出人は本田伊勢松となっています。本田は長崎県会議員から戦時下、高浜村長になった人ですが、本田屋の経営者でした。

このように連行されて、亡くなった女性の視点から、歴史を描くことができればと思います。

3 証言に学ぶ 強制連行・強制労働の実態

つぎに高島炭鉱に連行された朝鮮人の証言から強制連行・強制労働の実態をみてみましょう。

強制連行による集団的な動員がはじまるころ、1939年の夏に一般募集により高島で労働した朝鮮人の証言をみてみましょう。

韓英明（大邱出身）さんは1939年夏に長崎で「8時間労働・日給4円」の「募集」に日本人名で応じました。韓さんは当時16歳、小船で高島へと連れて行かれ、20人ほどの日本人飯場へと入れられました。飯場は藁敷きの土間、坑道で石炭を積む仕事をさせられました。親方は10銭・20銭と書き込んだ紙切れを渡しました。負傷しても抜糸もしないうちに仕事、逆らえば殴られ、逃亡して発見されればリンチを受ける現場でした。拷問による悲鳴や呻き声が飯場にまで聞こえました。飯場の出口は監視されていました。1940年の秋、韓さんは3人で丸太につかまって香焼まで泳ぎ、脱出したといえます（『娘・松坂慶子への「遺言」』）。

このような労務管理のなかで、強制的な動員がはじまっていくわけです。数多くの証言があります。

1939～42年の連行については、李任述（咸安、遺族）、表相万（固城、遺族）、崔洛相（晋陽、遺族）、劉喜亘（在日、吉田飯場）、南武岩（慶北）さんらの証言があります。

1943年～45年の連行については、尹椿基（金堤）、崔璋燮（益山）、田英植（井邑）、朴準球（順天）、金東植（務安）、徐正雨（宜寧）、姜道時（昌原・サハリン塔路炭鉱から転送）・金永吉（求礼・同）さんらの証言があります。

ここでは、尹椿基さんの証言をみてみましょう。

尹椿基さんは、1943年、17歳のときに全羅北道金堤郡から端島へと連行されました。金堤郡からは200人が連行され、釜山で計600人となり、そのうち100人が長崎へ送られ、50人が端島へ連行されました。朝鮮人は病棟裏の「三階」の建物に入れられ、尹さんは一番下の階の部屋に入れられました。賃金の3分の1は強制貯金され、3分の1は故郷への送金とされましたが、帰国してみると送金されていませんでした。食事はさつまいもや外米飯と汁、いもをのぞくと、飯はスプーン3杯程度でした。1日3交替で、低い天床の下で働かされました。3人1組で、一日のノルマはトロッコ10台以上でした。同じ村の李は餓死し、それを知らせる手紙を書くと、端島の派出所へと拘留されました。同じ村の金は往復する船に乗り込んで脱出しました。帰国の際に50円を支給され、闇船を買い、馬山の港に着きました（『百万人の身世打鈴』）。

ほかにも数多くの証言があります。尹椿基さんの創氏名は、「朝鮮人労務者に関する調査」の長崎分の高島炭鉱名簿にあります。

※証言については、長崎在日朝鮮人の人権を守る会『原爆と朝鮮人』1～6、1982～94、同『軍艦島に耳を澄ませば』社会評論社2011年、林えいだい『死者への手紙』1992年、同『筑豊・軍艦島 朝鮮人強制連行、その後』弦書房2010年、百万人の身世打鈴編集委員会『百万人の身世打鈴』東方出版1999年

4 現地を歩く・フィールドワーク地図

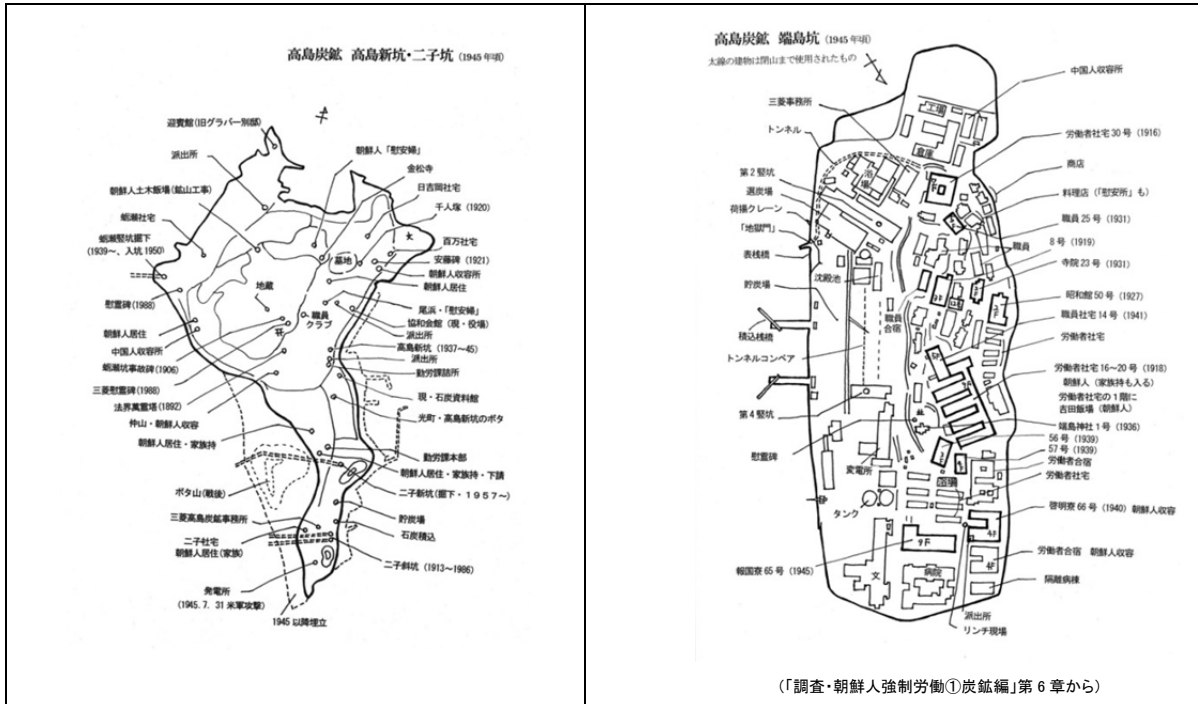
史資料を読んだり、証言から学ぶだけでなく、現地を歩き、当時の状況について思いを馳せることが大切です。現地調査をおこない、フィールドワーク用に地図を作成しました。

高島の主な炭鉱史跡をみてみましょう。

炭鉱関係の追悼碑をみれば、多数の労働者が亡くなった歴史を反映して、三菱炭礦時代法界萬霊塔（1892）、蛎瀬礦罹災者招魂碑（1906）、千人塚・供養塔（1920）などの碑があります。

朝鮮人の歴史を示すものには、安藤翁公德謝恩碑（1921）、岩崎平先生記念碑（1940）、三菱慰霊碑（1988）があります。安藤翁公德謝恩碑、岩崎平先生記念碑は劣化

していますが、三菱が復刻した碑から、その内容がわかります。



安藤翁公德謝恩碑には、三菱が1917年から「鮮人労働者募集」をおこなったこと、監督者安藤に「在島鮮人一般ノ感銘ル處」といった文字が刻まれていました。

岩崎平先生記念碑は、「内鮮一体」「出炭報国」の下、高島訓練所長岩崎平の教育を、動員された300人の寮生が讃えるというものです。

三菱慰霊碑の碑文は、その後、壊されましたが、建設期の写真資料をみると、碑文に「中国並びに朝鮮半島から来られた人々を含む多数の働く者及びその家族が、民族・国籍を超えて心を一つにして炭鉱の灯を守り、苦楽を共にした日々を偲ぶとともに、志半ばにして職務に殉じられ」とあります。戦時に強制的に動員したことへの反省や謝罪はみられません。1988年の時点での三菱の歴史認識が示されています。



高島で世界遺産とされた場所は洋式の立坑である1869年の北溪井坑跡です。世界遺産の期間を1910年までとすると、高島の主要な炭鉱遺跡は除かれてしまいます。また、事故による労働者の死者も多かったのですが、産業遺跡のみが登録され、労働者に関する追悼碑は除かれています。

1910年までの産業化を賛美する「明治日本の産業革命遺産」の物語は、高島炭鉱をめぐる歴史の一部を切り取ったものにすぎません。

高島には、1910年以降の高島新坑跡、二子斜坑跡、蛎瀬立坑跡、貯炭場跡などがあります。「明治日本の産業革命遺産」にはこれらの炭鉱史跡の解説はないのです。

高島炭鉱関連として、協和会館跡、勤労課詰所跡、金松寺、朝鮮人収容地跡、中国人収容施設跡、「慰安所」跡などを見て歩くことができます。

端島の炭鉱史跡についてみてみましょう。

端島全体が「明治日本の産業革命遺産」に登録されたものではありません。登録されたのは明治期の坑口と明治期の護岸などです。明治期の護岸の多くがその後にコンクリートで覆われています。端島に存在する建物のほとんどが1910年以降のもので、1910年までという物語が、端島のほとんどの建築物を世界遺産から除外することになりました。

上陸する地点には、積込棧橋跡、地獄門などがあります。端島には、選炭場跡、第2立坑跡、啓明寮・朝鮮人収容所、中国人収容所跡、料理店跡、慰霊碑、労働者社宅建物（吉田飯場跡）、報国寮などがあります。中之島で遺体が焼かれました。

端島対岸の野母崎町南古里には「南越名海難者無縁仏之碑」があります。戦後、端島から逃走し、溺死したとみられる4人の遺骨がここで発掘されました。

長崎市内の平和公園の朝鮮人追悼碑、岡まさはる平和資料館なども、関連施設です。

 <p>三菱高島礦業所 端島坑島歌</p>			
<p>1938年頃の端島炭鉱</p> 	<p>1938年頃の端島炭鉱</p> 	<p>地獄門</p> 	<p>第2坑坑口</p>
<p>朝鮮人収容所</p> 	<p>料理店（慰安所）跡</p> 	<p>中国人収容所跡</p> 	<p>死者を火葬した中之島</p> 
<p>端島神社島居 1927年</p>	<p>慰霊碑</p>	<p>南越名の碑</p>	

5 歴史の歪曲を問う

最後に、歴史認識をめぐる問題について話します。

「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産の登録は日本政府、官邸主導ですすめられたのですが、それは幕末の1850年代から明治末期の1910年で終わるという産業化賛美の物語です。萩の城下町や松下村塾がこの産業革命遺産に入れられているのは、吉田松陰が産業日本の志を育てたという物語によります。その物語は、サムライによる産業化への試みを評価し、テクノロジーは日本の魂と賛美するものです。

この物語は資本形成の視点で構成されています。労働者の視点や戦争による植民地支配・賠償金獲得などの国際的な視点はありません。ユネスコ理念は人権と平和の形成であり、世界遺産は人類の普遍的価値の形成のためにあるのですが、「明治日本の産業革命遺産」にはそのような人権と平和への言及はなく、産業化を賛美し、観光資源として宣伝するものです。それは、負の面が示されない、一面的な物語です。「日本スゴイ！」の宣伝であり、はやりの表現を使えば、「日本ファースト」の物語です。それが隣国の人々の共感を得ることにはならないでしょう

日本政府は2015年の世界遺産の認定に際し、朝鮮人などが、「意に反して連れてこられて労働をさせられた」が、それは「強制労働ではない」としました。

では、三菱の歴史認識はどうでしょうか。

1986年に三菱高島炭鉱は閉山し、翌年7月、三菱は高島の千人塚の地下納骨堂の端島分を含む遺骨を処分しました。1991年、全羅北道で端島韓国人犠牲者遺族会が結成され、三菱に対し遺骨の返還を求めました。それに対し三菱は、死亡者名簿・遺骨の所在は不明、事実関係が明らかにされておらず、当社の責任については言及することはできないと回答しています。三菱は高島での遺骨の発掘を拒否しました。戦後補償裁判でも、事実認知や未払い金支払いを拒否し、別会社や時効を主張するという無責任な姿勢をとりました。

三菱鉱業の後継会社である三菱マテリアルは2015年になって、戦時の強制労働について、連合軍捕虜に謝罪し、中国人への賠償支払いに応じましたが、朝鮮人については強制労働を認めようとしません。戦後、70年を経たいまも朝鮮人強制労働を認めようとしません。

被害を受けた韓国の側はそのような日本政府と企業の対応を批判しています。強制労働の事実は認められるべきです。しかし、韓国側の主張には事実誤認がいくつかあります。

たとえば、2013年11月5日、韓国の東亜日報は「調査・朝鮮人強制労働」炭鉱編を書いた竹内は高島炭鉱に3万9000人の動員を把握したと報道しました。わたしは高島炭鉱には推定4000人の動員と書いているのですが、3万9000人とされました。さらに韓国政府は2015年の「明治日本の産業革命遺産」の登録時、高島炭鉱への強制動員を4万人と宣伝しました。この4万人説を訂正したという報道はありません。

2015年5月5月14日、韓国の中央日報は「600人連行された端島炭鉱…病気・変死・事故で122人死亡」と報道しました。戦時下の1939年から45年までの端島への動員数は千数百人とみられ、端島には常時朝鮮人が600人ほど収容されていました。記事の死者120人は1925年から45年にかけての子どもを含む朝鮮人の死亡者数です。戦時の朝鮮人の死亡者数は判明分で50人ほどです。

このような誤報が訂正されることなくコピーされ、2017年7月にはニューヨークで、端島で600人が強制労働させられ、120人が殺されたという映像宣伝となりました。

資料分析が十分になされないままの間違った宣伝が、政府・マスコミなどによって流布されています。それはただされるべきです。

1990年代に多くの戦争被害者の証言がありました。その証言から学んだことは、強制動員者の尊厳を回復できるような、被害者が歴史の主人公になるようなものを記すということでした。長崎で人権運動と強制労働の調査をすすめ、最近亡くなった高實康稔さんはサンテグジュペリやレジスタンス文学の研究をしていました。みえないものを伝えるということ、ひとりひとりの命、ひとりひとりの人間愛、ひとりひとりのつながり、生命の重さ、人間愛、連帯感もまたみえないものであり、大切にしなければならないものです。

そのような大切なものを、戦争をすすめる国家は破壊することで、動員をすすめました。批判的な想像力を持ち、被害者の視点に立ち、そのような動員政策とその下での人間の状況を記していきたいと思います。

(2017年7月9日の講演内容に加筆)